

源頼朝の挙兵と諸国の目代

野口実

はじめに

これまで、武士論とくに地方武士の存在形態に関する研究においては、受領あるいは知行主の政治的立場を前提に当該国の在庁に連なる有力武士の動向について検討を加える方法が一般であった。⁽¹⁾しかし、後述するように、近年、国衙在庁機構を統括する目代が政治的にも主体的な動きを示しうる存在であり、受領の任国支配の上では目代こそが重要なのであって、在庁官人はそれほど意識されていなかったことが明らかにされつつある。⁽²⁾

しかりとすれば、治承・寿永内乱期における諸国武士団の動きも、こうした研究成果に基づいて再検討しなければならぬであろう。そこで本稿では、典籍類も含めた史料を博搜して当該期の目代を検出し、その出自や存在形態を概括した上で、鎌倉幕府成立の震源地である坂東諸国を対象に、その動向、さらには歴史的な役割について若干の検討を加える作業を試みたい。

(1) 私自身、拙著『坂東武士団の成立と発展』（戎光祥出版、二〇一三年、初出一九八二年）の第三章「平氏政権下の坂東武士団の存在形態について」において、平家が国衙在庁機構を通して国内の武士団の組織化を図ったという観点から、平家知行・受領国とそれ以外を分けて分析を試みたことがある。いま、その方法の有効性を否定するものではないが、この論文を執筆した段階では、目代を知行国主ないしは受領と政治的に一体の存在として理解していた点に問題がある。

(2) 以下の一に掲げた①～⑦の研究（とくに⑦—b—d・f・g・i—m）。

一 諸国目代に関する先行研究

まず、中世成立期における諸国目代に関係する先行研究を一瞥して、本稿の論点に関わる事実の指摘や論者の見解を提示しておきたい。

① 五味文彦「花押に見る院政期諸階層」¹

a 天永二年（一一二二）正月の除目の僉議において、史巡の二番目の候補に挙げられた小槻良俊は陸奥の藤原清衡のもとに下向していて問題視されたが、結局大隅守に補任された。当時、外記や史は労をとげて叙爵され宿官の介に任命されて、受領の欠が空くのを待つのが通例で、受領候補生が、五位になり官を離れるとすぐに受領郎等や目代として活躍した。

b 外記や史は五位となつて退任した後、多くは受領の目代となつて遠国に下向したから、その実務能力は地方社会において生かされていた。

c 伊豆で源頼朝が挙兵した当時、山木兼隆は武勇の目代、史大夫の中原知親は文筆の目代として平時忠の知行国支配を担っていた。

d 鎌倉幕府の機構整備は史大夫や外記大夫によって行われたが、安芸国高田郡司の所領を継承し、これを敵島社に寄進した中原業長は「外記大夫」、阿波に上陸した源義経が急襲した粟田良連（阿波民部大夫成良の叔父）も「桜間外記の大夫」と称された外記大夫であった。

② 飯沼賢司「国司制度の変質」

a 平資孝は白河上皇の近親として知られる藤原盛重の所領丹波国六人部庄の沙汰人だが、盛重が相模守であったときはその目代をつとめた。彼には下総目代の経歴もあり、国務や荘務を請け負う「渡り官人」だったことが分かる。

③ 野中寛文「讃岐武士団の成立」

a 「八」を实名の通字とし、右衛門や馬寮などの武官に任じられている橘氏の一族が、十二世紀後半の一時期に讃岐国の目代を歴任しており、彼らは在庁綾氏ら国内の有力者と密接な関係を結んだことが想定され、そのことが治承・寿永内乱の際に鎌倉に下った橘公業が頼朝軍の西海道攻めに際して讃岐国の武士を統率する立場に立つことにつながった。

④ 五味文彦「政治と文化の空間」

a 文治四年（一一八八）四月十三日に焼失した院御所六条殿の再建に際して、御所内に設けられた長講堂の造営を担当したのは院分国播磨の目代で院主典代の中原清業であった。注目されるのは、清業がこれ以前に平頼盛の後見として、鎌倉に下って源頼朝と平頼盛の連絡役をつとめていたことがあるばかりか、後に栄西が幕府の援助で六波羅の北側に建仁寺を建てたときに奉行となつていふという事実である。彼は朝廷と幕府をつなぐ人脈の一人といえよう。

⑤ 大津透「平安時代の地方官職」

a 『小右記』寛仁二年（二〇一八）四月五日条に伊予守源頼光の目代として見える「五倫朝臣」は小野五倫で、彼は外記出身で受領の経験もあつた。

⑥ 守田逸人「伊賀国における伊勢平氏の展開―荘園公領制成立期における現地社会の動向―」⁶⁾

a 平家貞の子の家実は伊賀国六条院領の経営を支える人物であると同時に伊賀国目代中原利宗の目代として国衙行政にも携わつていた。

b 目代中原利宗は、久安五年（一一四九）の時点で「当国数任目代」と呼ばれており、彼が数代の国司にわたつて目代を勤めたのは、その実務能力によると考えられる。

⑦ 吉永壮志「平安時代後期における目代の具体像―半井家本『医心方』紙背文書の検討から―」⁷⁾

a 地方行政において大きな役割を果たしたであろう目代に主眼を置いた分析なくしては、古代から中世にかけて

- の地方支配を解明することは極めて困難である。
- b 受領が自らの意で近親縁者などの関係者を目代に任じると古くより解され、目代は受領の忠実な私吏とみなされがちであるが、必ずしもそうではなかった。
- c 受領が交代するにもかかわらず、目代はそのまま留任している。このような事例として、久安五（一一四九）年の段階で「数任目代」、「数代目代」であった伊賀国目代中原利宗が確認できる。受領の任期に関係なく、数代にわたり目代を務めることもあり、目代が受領の私吏であるとは単純にいえず、受領との個人的関係のみで目代を捉えることはできない。
- d 近江・加賀・越中三国の目代を歴任した善大夫は、受領の私吏ではなく、一定程度自立した存在であったと思われる。
- e 目代は受領に準ずる位階を持ち、高い実務能力が期待されていた。
- f もともと受領が有していた郡司・雑色人解任権が目代の手に戻しているのは、受領から一定程度自立した目代が国内における人事権などの権限を獲得し、国内支配を優位に進めていたことを明確に示す。
- g 受領の任国支配の上で目代こそが最重要なのであって、在庁官人はそれほど意識されておらず、受領側と在庁官人・郡司などの現地出身者が文書を直接やりとりすることはなかった。両者の橋渡しの役割を果たした存在、それが目代であった。
- h 目代は一国の範囲を越え、様々な交流をしていたと考えられる。
- i 平安時代後期の目代を介しての受領による間接的な任国支配は、目代の対応如何で成否が決まる面をもっていたといえる。

j 目代は、国内における人事権などの様々な権限を梃子に強力に国内支配を遂行した。国内の住人からの申請についても受領に取り次がず、目代が独自に判断を下すことがあり、受領からの下達のみならず、国内からの上申においても受領と国内の者との間に目代が存していた。

k 留守所内の在庁官人は留守所の長たる目代の配下として国務にあたるにすぎなかった可能性が高い。

l 目代の高い位階は、地方にあって他を圧倒し、在庁官人は目代に従属する立場で、国務の一端を担ったにすぎないのではないか。

m 受領とそれに準ずる位階をもつ目代の関係は、必ずしもしつかりとした上下関係とはなりえず、目代が受領の指示に従わない可能性も十分にあった。

n 目代は文化的交遊関係をもととする国を越えた横の結節点にもなっており、当該期の地方支配、文化交流を支える存在であった。

注

(1) 五味文彦『院政期社会の研究』(山川出版社、一九八四年)所収。

(2) 『長野県史 通史編 第一巻 古代・中世』(一九八九年)第五章第二節。

(3) 『四国中世史研究』創刊号(一九九〇年)掲載。

(4) 五味文彦『藤原定家の時代―中世文化の空間―』(岩波書店、一九九一年)第三章。

(5) 山中裕・鈴木一雄編『平安貴族の環境』(至文堂、一九九四年)所収。

(6) 『ヒストリア』第一九五号(二〇〇五年)掲載。

(7) 『待兼山論叢』第四五号(二〇一一年)掲載。

二 源頼朝挙兵段階における坂東諸国目代の動向

治承四年(一一八〇)八月に伊豆で挙兵した源頼朝は、同国目代山木兼隆を討つと、軍を相模に向けたが、石橋山合戦で大庭景親の率いる追討軍と戦って敗れ、土肥実平の手を借りて真鶴岬から安房に逃れることとなる。^①一方、頼朝に呼応して蹶起した三浦氏の一族も武蔵国の秩父平氏を主力とする追討軍に衣笠城を攻められて、安房に脱出する。^②

相模国では在庁系の三浦・土肥(中村)氏が頼朝に呼応し、大庭景親が平清盛からの私的な命令を受けて追討軍を編成している。この間、目代の動静はまったく不明である。

安房に上陸した頼朝は当国の住人安西景益に「在庁」および「京下りの輩」を捕らえて参向するように命じているが、ここでも目代の動きは不明である。ちなみに、この時の安房の知行国主は、後に朝廷における親頼朝派公卿として活躍する吉田(藤原)経房であった。

上総には、平忠常の直系で両総平氏の族長的立場にあった上総広常が上西門院領玉崎庄を本拠に周辺諸国にも及ぶ勢力を誇っていたが、治承三年末の政変で国守(上総介)が院近臣の藤原為保から平家の有力家人で坂東八ヶ国の侍別当(奉行)となった伊藤忠清に交代すると、忠清は現地に武勇の目代として高倉院武者所に祇候した経歴を持つ平重国を派遣して上総氏の抑圧をはかったらしい。同年九月、頼朝軍とこれに応じた上総広常らの軍が上総国府に侵攻した際、重国は討死を遂げることとなる。

下総でも目代は「平家方人」であった。その素性などは全く不明だが「もとより有勢の者」であったという。これに対して、頼朝への参向を決めた八条院領千葉庄を本拠とする当国在庁の千葉常胤は、子息の胤頼・孫の成胤をもって目代の館を襲撃させた。目代は「数十ばかりの輩」で防戦につとめたが首級をあげられている。

ついで頼朝軍は平知盛の知行国である武蔵に進攻した。秩父平氏ら当国の武士団は次々と帰降したが、知盛の家人で目代をつとめていた武藤頼平も頼朝が武蔵国府に入った時、先祖が源義家から賜った旗を掲げて馳せ参じたという。^③

十月、頼朝は相模に入り、鎌倉を本拠と定めた。しかし、大庭景親をはじめとする在地武士の多くは都から下向する追討軍への合流を意図していたらしく、頼朝に参向したのは富士川合戦で平家軍が大敗を喫した後のことであった。合戦後頼朝は、矛先を転じて常陸に向かい奥七郡に盤踞する佐竹氏を攻めるが、その際国府で叔父の義広（志太三郎先生）・行家（新宮十郎）と会見している。

このように相模・常陸の目代の動静はつかめないが、結局国衙機構は頼朝軍に接収されている。一方、頼朝が直接進攻しなかった上野・下野に目を転ずると、上野では足利俊綱が府中の民居を焼き払って国衙を掌握しようとする動きを見せ、下野では同国大掾小山政光の妻（頼朝の乳母の一人・後の寒河尼）が、武蔵に入った直後の頼朝のもとに末子を伴って参陣したことが知られる。^④

以上、頼朝拳兵直後の坂東諸国において、僅かながらもその可能性のある者も含めて目代の行動が明らかなのは上総・下総・武蔵の三ヶ国に過ぎず、他の五カ国については全く不明とせざるを得ないのである。

注

(1) 源頼朝の挙兵とそれに対する坂東武士団の対応、頼朝軍の進軍経過については拙著『坂東武士団の成立と発展』を参照されたい。

(2) 房総半島における頼朝の進軍経過については、拙稿「源頼朝の房総半島経略過程について」(拙著『中世東国武士団の研究』高科書店、一九九四年、初出一九八五年)において諸史料の比較を行いながら詳述した。

(3) 『統群書類従』所収『武藤系図』。武藤氏は秀郷流藤原氏に属し、『尊卑分脉』には、頼平の祖父頼氏が鎮守府將軍源頼義の僂仗をつとめたとあり、頼平とその父資頼が武者所に祇候したところから「武藤」と号されるようになったという。

(4) 寒河尼については、拙稿「寒河尼と小山三兄弟」(『日本歴史』第七九八号、二〇一四年)を参照されたい。彼女には在京奉公の経歴があったから、頼朝のもとに参向した理由については、中央政界における独自の情報網による可能性も想定されよう。

三 相模国目代中原清業の発見

上述のように、源頼朝挙兵の時点における安房・相模・常陸・上野・下野の目代の動静については全く不明とせざるを得ない。しかし、誰が目代に在任していたのが判明すれば、その人物の経歴や背景から行動の類推は可能である。とくに、頼義以来、河内源氏の東国における拠点となった鎌倉が所在し、頼朝の挙兵に三浦・中村氏ら在京系の有力武士団が呼応した相模国の目代が明らかに出来れば、鎌倉政権↓幕府成立の意味そのものも問い直す材料を得ることにつながるだろう。しかし、『吾妻鏡』にも『平家物語』の諸本にも相模目代は見いだし得ないので

ある。

ところが、近年、まさに頼朝拳兵時の相模目代が森幸夫氏によって特定された。⁽¹⁾この時代の研究者が在地勢力の問題ばかりに関心を向けているためか、この森氏の論文はあまり注目されていないようであるが、これは治承・寿永内乱および鎌倉幕府成立史の研究にとっては画期的な大発見といえる。

森氏は、平家都落ちに加わらずに京都に留まったものの、木曾義仲入京後に鎌倉に下向した平頼盛が「目代」の後見のもと、相模国府に宿したという『玉葉』寿永二年十一月六日条の記事に注目し、この目代を相模目代と見るとともに、同元暦元年四月一日条に「頼盛卿後見侍清業」、同七日条に「頼盛卿後見史大夫清業」とあることから、相模目代を「史大夫清業」に比定されたのである。史大夫清業については、すでに五味文彦氏（一〇・④、以下では一を略す）によって、仁安元年（一一六六）〜同三年に頼盛が大宰大貳に在任したときに大宰府の目代であったことや、文治元年（一一八五）頼盛の知行国である備前、文治四年に後白河院の知行国であった播磨の目代をつとめていたことが指摘されており、清業はまさに目代を職能とする「史大夫」の代表的な存在ということになる。頼朝の拳兵した時点の相模守は治承三年（一一八三）十一月に就任した藤原範能であったが、彼は寿永二年八月に但馬守に遷任しているから、頼盛下向時の相模守は不在で、範能の目代をつとめた清業がそのまま在国していたと森氏は推測する。それは⑥―b・⑦―cからも首肯されるであろう。

平頼盛が平家都落ちに加わらず、木曾義仲入京後、坂東に下って頼朝の政権樹立に積極的に協力する姿勢を示したことは旧稿で詳述したところだが、⁽²⁾清業はその手足となって働いたことになろう。彼は頼盛が大宰大貳や備前の知行国主だったとき、その目代をつとめていることから明らかに、いわば頼盛にとっては文筆の郎等と呼ぶべき存在であった。⁽³⁾

頼朝の挙兵に際して、相模国では大庭景親が国内の武士たちを動員して追討軍を編成したが、国衙在庁系の三浦・中村氏の一族はこれに敵対する行動をとっている。この事実をもって、頼朝の挙兵に、頼盛との連絡のもとで、この中原清業が関与した可能性も指摘できよう。少なくとも相模国内の状況は清業から頼盛に報告されていたはずである。坂東に下った頼盛は八条院―後白河院のルートで京都との政治折衝を進めたと思われるが、清業がその後白河院の北面に列していたことも興味深いものがある。⁽⁴⁾のちに彼は対馬守の官途を得ており、子息の章清は左衛門尉に任官して幕府に祇候しているから、⁽⁵⁾森氏も指摘されるように、彼とその一族は頼朝から厚遇されていた可能性が高い。彼はこれからの通史叙述においては、然るべき評価が与えられなければならない存在といえるのではなからうか。

注

- (1) 森幸夫「頼朝挙兵時の相模国目代について」〔無為 無為〕第九号、二〇〇九年。
- (2) 拙稿「北条時政の上洛」(京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第二五号、二〇一二年)。
- (3) 実際、『玉葉』文治元年正月二十三日条は、除目の際にいったん大隅守に任じられたのち対馬守に改任された清業を「頼盛卿郎従」と記している。
- (4) 『後白河院北面歴名』(小松茂美「右兵衛尉平朝臣重康はいた―後白河院北面歴名」の出現―)古筆字研究所『水荳』第六号、一九八九年)。なお、拙稿「下野宇都宮氏の成立と、その平家政権下における存在形態」(京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』第二六号、二〇一三年)九の注(8)を参照されたい。
- (5) 『吾妻鏡』建仁元年九月十五日条。また、『統群書類従』所収『坂上系図』を抄出すると以下のごとくである。

字岡田太郎

從五位下豊前介

重盛

清重

堀河院御時。依対馬守源義親同心被誅畢。

鳥羽院御時。依父重盛勅勘事。乳父主計

允定清為子。仍号中原。

從五位下大宰少貳史

使 左少尉伯耆權介從五位下

清業

章清

対馬守後白川院北面

後鳥羽院北面

四 鎌倉幕府成立期における諸国目代の評価

治承・寿永内乱を表象するのは戦争であるから、その研究においては軍事的な側面が照射されて当然である。しかし、川合康氏が奥州合戦を例にして指摘されたように、戦争にも戦闘という現象の背後にシビアナ政治が存在し、^①戦闘に勝利した後にも占領地に対する軍政という困難な課題が待ち構えていたのである。王朝権力や宗教勢力との交渉もその大きな要素となろう。したがって、武士は武芸・戦闘のプロたるだけでは新たな政権は生み出せない。つねに文士的な能力が要請されるのである。武士身分を有する存在は国衙・荘園公領における行政官であり、しかも在京活動によって、中央諸権門と個別の関係を結んでいただけではなく、列島各地の武士たちと「一所傍輩のネットワーク」を有していたから、「鎌倉殿」の政権は西国にも支配を及ぼすことが可能になったのである。^②

そうした東国武士の中には西国の目代に登用される者もあった。たとえば梶原景時である。彼が頼朝の側近に仕えて「能吏」としての側面を發揮したことは夙に指摘されているが、頼朝の挙兵以前から徳大寺家の家人であったことも手伝って同家の知行国である美作の目代に任じており、また、武藏の武士大井実春は、因幡守となった中原（大江）広元のもつて、同国の目代に抜擢されている。旧稿でも指摘したように、実春の父紀実直は源仲政（「源三位頼政」の父）が下総守となったとき、これに従って下総国衙に一定の地位を占めた形跡があり、その後、武藏に目代として下向した可能性が高い。しかも、この一族はもともと伊勢国と関係をもっていた。^④下総や相模の目代をつとめた平資孝（②―a）や伊賀国の「数任目代」であった中原氏（⑥―b）、そして讃岐国の目代を歴任した橘氏（③―a）と同じように目代を家職としていた徴証もうかがえるのである。

当時、これと似た存在は何例か挙げることができる。本貫地の伊勢を逃れて伊豆の工藤介茂光の婿となつていた加藤景員は伊勢目代の子と伝えられており、また『曾我物語』によると、茂光の外孫にあたる曾我兄弟の母は、はじめ伊豆の目代左衛門尉仲成と結婚して一男一女をなしたというし、文治元年（一一八五）八月、甲斐源氏のはじめ美遠光が頼朝の分国である信濃の国守に補されると、その目代には頼朝の乳母比企尼の猶子比企能員が登用されている。^⑥さらに下野の宇都宮氏の一族が、源義朝の下野守在任中にその目代をつとめていた可能性があることは別に論じたとおりである。^⑦

諸国目代の供給源の多くは中央の文官として騰（旁）を積んだ「史大夫」ないしは「外記大夫」であったが（①―a・b、⑤―a）、逆に、阿波の桜間良連のように、地方武士の中にその文官のポストを得る者が存在したという五味文彦氏の指摘（①―d）は重要である。従来、武士政権成立に対する理解は、武士対貴族、地方（東国）対中央（京都）の図式で語られることが一般であった。しかし、こうした事実はその相対化をせまるものではないだろ

うか。かつて石井進氏は、源頼朝の挙兵成功の背景にあつた東国武士の不遇を指摘する際に「国には目代に随ひ、荘には預所に仕へて、公事雑役にかり立てられ、夜も昼も安き事なし」という『源平盛衰記』の一説を取り上げられたが、そこで示された「東国武士の抑圧者」とは異なる側面を評価する必要を指摘しておきたいのである。源頼朝の挙兵は、相模目代中原清業はもとより、京都ないしは畿内近国に基盤や強い関係を持つ文官的な武士によつて実現され、成功した側面が大きいのである。

従来、地方社会における武芸專業者として野蛮な側面でのみ捉えられていた東国武士も、実は長期の在京経験を有し、その間に祇候した権門のもとで列島各地から集まった同輩たちと「一所傍輩のネットワーク」を結び、和歌を詠む程度の教養も積んでいた存在として理解されるようになってきた。⁽⁹⁾ そうした鎌倉幕府成立期の状況理解との相関の中で、あらためて国目代の歴史的な位置づけを行う必要を認めざるを得ないのである。

注

(1) 川合康「奥州合戦ノート―鎌倉幕府成立史上における頼義故実の意義―」(同『鎌倉幕府成立史の研究』校倉書房、二〇〇四年、初出一九八九年)。

(2) 拙著『源氏と坂東武士』(吉川弘文館、二〇〇七年)、拙稿「東国武士」の実像」(拙著『東国武士と京都』同成社、二〇一五年、初出二〇一〇年)。

(3) 『吾妻鏡』建久二年閏十二月二十五日条。なお、梶原景時については、山本幸司『頼朝の精神史』(講談社、一九九八年)ならびに滑川敦子「和田義盛と梶原景時」(拙編『中世の人物 京・鎌倉の時代編 第二巻 治承く文治の内乱と鎌倉幕府の成立』清文堂出版、二〇一四年)を参照されたい。

- (4) 拙稿「京武者」の東国進出とその本拠地について―大井・品川氏と北条氏を中心に―（拙著『東国武士と京都』、初出二〇〇六年）、同「摂津源氏と下河辺氏」（拙著『東国武士と京都』、初出二〇一〇年）。
- (5) 拙稿「流人の周辺―源頼朝挙兵再考―」（拙著『中世東国武士団の研究』、初出一九八九年）。
- (6) 石井進『日本の歴史 第一二巻 中世武士団』（小学館、一九七四年）、同「比企一族と信濃、そして北陸道」（『石井進 著作集 第五巻 鎌倉武士の実像』岩波書店、二〇〇五年、初出一九九〇年）。
- (7) 拙稿「下野宇都宮氏の成立と、その平家政権下における存在形態」（拙著『東国武士と京都』、初出二〇一三年）。
- (8) 石井進『日本の歴史7 鎌倉幕府』（中央公論社、一九六五年）五七ページ。
- (9) 拙著『東国武士と京都』参照。

むすびに

仏教文化の伝播に象徴されるように、中世前期の日本文化は武士勢力の発展とその移動によるところが大きい。その具体的展開を明らかにするためには、幕府ないし国衙・守護所など地方行政機関で活動する武士の吏僚的側面を評価する必要があると認められよう。そのためには、当該期における王朝政府の政治構造や身分秩序を踏まえ、^①これまで在地領主ないしは武芸專業者、あるいはその心性面の暴力性に主たる関心が向けられていた中世前期の武士のあり方について、^②彼らの行政官・文化人としての機能に着目し、その実像を明らかにして武士理解の相対化と総合化をはからなければならない。とくに坂東の武士については、多くの研究が積み重ねられているが、多くは「領主制論的」な発想によるものが多く、^③文化現象に即応した形で提示されたものとはいえない。そこで、個別研究の

実証的成果を新たな観点から再検討していく作業が求められるのである。そうした観点から、本稿が「武士論」「平家政権論」「鎌倉幕府論」、さらには中世前期地方社会における仏教信仰の展開過程の研究に些かなりとも寄与するところがあれば幸いである。

注

(1) 元木泰雄『院政期政治史研究』（思文閣出版、一九九六年）、美川圭『院政の研究』（臨川書店、一九九六年）などの業績からは学ぶべきところ多大なものがある。

(2) 武士職能論の到達点は、高橋昌明『武士の成立 武士像の創出』（東京大学出版会、一九九九年）の示すところである。また、東国武士の心性については、拙稿「鎌倉武士の心性」（五味文彦・馬淵和雄編『中世都市鎌倉の実像と境界』高志書院、二〇〇四年）などを参照されたい。

(3) 拙稿「武士の性格―中世武士像は多様である」（歴史科学協議会編『歴史の「常識」をよむ』東京大学出版会、二〇一五年）、拙著『東国武士と京都』の「序」を参照されたい。

〔付記〕本稿は、京都女子大学宗教・文化研究所平成二六年度共同研究「中世前期における吏僚系武士と、その地方社会における文化活動に関する研究」（研究代表者・野口実、研究協力者・岩田慎平・坂口太郎・畠山誠・山本みなみ）による成果の一部である。このほか、当該共同研究の成果としては、岩田慎平「実朝室周辺の人々をめぐって―鎌倉前期公武関係史に関する一考察」（京都女子大学宗教・文化研究所ゼミナール『紫苑』第一三号、二〇一五年）がある。

〈キーワード〉

目代 武士 文士 鎌倉幕府